海抜ゼロメートル
地帯のくらしを守る

堀川（ほりかわ）・土手町南蛮樋（どてまちなんばんひ）

関ヶ原の戦い後、中国地方八カ国を有していた毛利氏の領国は周防長門の二国となり、極度の財政難に苦しみます。これを打開するために、干拓による新田開発が盛んに行われました。明治６年（1873）毛利藩の田畑総面積は、藩政初期の慶長 15 年（1610）に比べ約 50％増加しており、藩直営の公儀開作や藩士の拝領開作など、藩をあげて推進した取組が実ったようです。

慶安３年（1650）、毛利一門八家のひとつ大野毛利氏の初代就頼（なりより）が平生湾での開作を願いでると、翌年には許可されました。設計施工を担当した横道忠右衛門は、東の戎崎から野島、玖珂島、磯崎まで約３㎞の土手を築き、湾内の野島山、玖珂島山などの土石で埋め立てました。また雨水の排水のために大内川、熊川、堀川を設け 42 の樋門をつくりましたが、８年を費やした工事も、完成間近２度にわたる暴風雨に見舞われ土手は決壊しました。再び普請にかかり５カ月後の万治元年（1658）、120ha の田畑と 20ha の塩田が完成しました。

熊川に作られた排水用の土手町（どてまち）南蛮樋は、ロクロの心棒部分と板戸を縄で結び、鉄製ハンドルを手動で回転させることにより、板戸を上下させて海水の防禦を図る仕組みになっています。干潮時には板戸を巻き上げて上流からの余水を放流し、満潮時には板戸を降ろして下流側からの海水の進入を防ぎます。南蛮樋は、ロクロを使用する点で唐樋と構造が異なり、より精巧な装置となっています。南蛮樋の名称は、唐樋に対してオランダ技術を使った樋門の意味で用いられたものです。当時の最先端の技術で造られた南蛮樋は 300 年余りの間、現役で毎日２回の満潮時に必ず樋守によって樋門が閉められました。

また大内川は、海水面との関係で開作の土地よりも高く作られたため天井川になっていました。このため田の排水は大内川の川底下に通してある暗渠から大内川の上がわらに沿って流れる下がわらに出ていきます。上方の悪水を大内川の川底下を通して下がわらへ流す部分が二階川といわれており、暗渠は６カ所つくられています。当時、随分苦労した普請と考えられ、その技術に注目すべきものがあります。

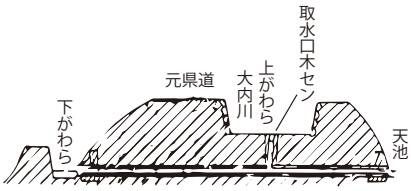
平生の人々の生産と生活を守ってきた南蛮樋も昭和 62 年（1987）に大内川排水機場が完成し、その使命を終えましたが、貴重な県指定有形民俗文化財として移築されました。

熊川の河川改修工事のため移築復元された土手町南蛮樋（山口県指定有形民俗文化財）

■位置図

堀川と堀川南蛮樋跡
堀川南蛮樋は土手町南蛮樋を見習って作られた

移設された堀川南蛮樋（平生町堀川公園内）
樋門の上部と中程が梁、下部に敷石があり、これに４本の門柱が組み立てられ板戸がスムーズに開閉できるよう樋門本体が固定されている。



二階川断面見取図
【「一門六家大野毛利氏と平生開削（平生町教育委員会）」より転載】